

【氏名】 登 久希子

【所属大学院】(助成決定時)

大阪大学大学院

【研究題目】

ニューヨークにおける「アート」の生成
— フランクリン・ファーネイスを事例に

【研究の目的】

本研究の目的は、現代アメリカ／ニューヨークにおいて、どのように「アート」とアーティストがつくりだされていくのかを明らかにすることにある。西洋近代的な芸術観は「天才」や「巨匠」を見出し、「アート」に独自性や単一性を付してきたが、「アート」をうみだすのはひとりの所為なのだろうか。昨今では美術史においても、ひとりの「天才」の創作の結果としてではなく、パトロンや弟子などとの関係のなかで生み出されてきたものとして「アート」を論じる動きもあるが、民族誌をまじえ、「アート」が生み出される過程を詳細に分析した人類学的な研究は少ない。そこで本研究では、「オルタナティヴ・スペース」としてはじまったフランクリン・ファーネイス(Franklin Furnace 以下 FF)がどのように「アート」を成立させていくのかをフィールドワークを通して追ひ、現代のアメリカにおいて「アート」が生み出されるダイナミクスを明らかにする。

【研究の内容・方法】

FF は 1976 年にトライベッカで活動を開始して以来、一貫して「売ることを目的としない」作品や「政治的で過激な」作品を取り扱ってきた「オルタナティヴ・スペース」である。「オルタナティヴ・スペース」とは、「インスタレーション」や「パフォーマンス・アート」など、1970 年代前後に注目を浴びた従来の表現形態とは異なる作品とともに発展した空間であり、多くはアーティストによって設立、運営されてきた。そこでは、市場的な価値に基づかない作品の制作や発表が目指され、ギャラリーや美術館といった場におけるホワイトキューブ的实践—つまり作品の文脈が無化され、アーティストの手を離れたところで流通するような状態—が否定されてきた。1970 年代に盛り上がりを見せた「オルタナティヴ・スペース」のうち、数年で活動を終えた団体もあれば、現在も活発に活動を続けている団体も多い。

本研究では、FF が扱う「パフォーマンス・アート」の作品を通して、どのように若手アーティストがニューヨークでの作品発表を実現し、彼らのつくるものが「アート」として認識されていくのかを追う。そのために 2008 年度の the FF Fund のパネル・ミーティングに出席し、アーティストが選ばれるプロセスや、そこでなされる様々な語りを追った。

政府や基金等の助成金を利用して作品の制作や発表を行うアーティストは多いが、FFも毎年5名程度の「新進の(emerging)前衛的なパフォーマンス・アーティスト」に対して、ニューヨークにおける作品発表のためのグラント—the FF Fund—を用意している。FFには常駐のキュレーターがおらず、アーティストの選出は毎年異なる数名のパネル・アーティスト(審査員)による会議で決定される。そのため審査の手がかりとなる「新進の」「パフォーマンス・アート」といった概念も、年ごとに変化するという。ディレクターのマーサ・ウィルソンが選ぶ審査員はFFと関係の深いアーティストから構成されており、彼らはこれを「アーティストがアーティストを選ぶ」方式と呼んでいる。

【結論・考察】

現代のアメリカにおいて「アート」が生み出されるダイナミクスは、作品やアーティストから派生する、人やモノを含めたさまざまなアクターの関与を追い、民族誌というかたちで描き出すことにより明らかになる。本調査ではthe FF Fundというパフォーマンス・アーティストのための助成金の審査過程に注目し、ニューヨークで「アート」が発表に至る一端を追った。

審査の過程で全員の意見が一致することは稀だ。各々のパネル・アーティストは、応募作品について、自分自身の作品やこれまで見たことのある他人の作品の情報や知識を総動員して語り、肯定したり否定したりする。調査をとおして、「パフォーマンス・アート」や「新進の」「前衛的な」といった概念やキーワードが、作品を選ぶ現場においてどのように確認され、交渉されているのか、また審査時にどのようなアクターが関与し得るのが明らかになった。

今後は、審査で選ばれたアーティストのうち、アメリカ国外からやってくる数名のアーティストに注目し、彼らがどのように初めてのニューヨークでの作品発表を行うのか、とくに作品の制作段階に重点をおいて、引き続き調査を行いたい。